

巻頭言

明暗を分けた「目的」の違い

株式会社ファインズ
代表取締役社長

木津 広美 VEL



『泥棒と警察は、同じ方向に向かって全力で走っている』という話をご存知でしょうか。同じ行動に見えても、両者には決定的な違いがあります。その違いとは、ズバリ「目的(想い)」です。目的とは、それほどに結果や評価に大きな影響を及ぼします。

今回は、この「目的」の違いから生じたトラブルについて、私の体験談をご紹介します。

2009年に私のバドミントン人生(元・日本代表)を支えてくれた恩師が66歳で亡くなりました。恩師は、高校教員時代、バドミントン指導者として女子ジュニアの日本代表チームの監督を務めるなど、わが国のバドミントン界の発展に大きな功績を残されました。教え子の数は日本代表クラスを含め200余名。

恩師が担当医師から病名を告げられたのは、地元『新潟国体』開催直前。本人は、『国体当日までには絶対に退院する』と意気込んでおられました。

恩師の病気の噂は、一瞬にしてバドミントン関係者に広まり、全国から教え子やスポーツ関係者が病院に駆けつけました。しかし、ひと月もしないうちに、母校バドミントン部OG会から「恩師が元気になられるまではお見舞いを控えるように」という連絡が回ってきました。連日の見舞い客の対応で、恩師と奥様の疲労は、誰の目にも明らかでした。

その後しばらくして、恩師は息を引き取られました。葬儀には全国から教え子が集まりました。そのとき、どこからともなく「木津は病室に入れてもらったようだ」という非難めいた噂が流れてきました。教え子の中で、私とH先輩はほぼ毎日病院に通い続け、二人が病室の中に招かれたのは間違いのない事実でしたが、私自身は、その真相を誰にも話すつもりはありませんでした。しかし、他の卒業生はそれでは納得してくれそうもなかったため、私は以下のような話をしました。

“もしも、恩師の闘病中に「お見舞い自粛」の連絡が回らなかったら、卒業生はどんな行動に出ただろうか。病院に駆けつけ、病気の恩師に病名や体調を尋ね、励まして帰る…。卒業生の不満の原因は、それが自分たちには許されなかったからだと思う。

しかし、私とH先輩の目的は、「家族のサポート」だったのである。なぜなら恩師が治療に専念するとすると、奥様も一日の大半を病室で過ごすことになる。つまり、家族も食事や睡眠も不十分になってくるし、必然的に自宅の家事も疎かになる。そんな状態の中で、病室で家族水入らずの時間をリラックスして過ごしてもらうために、周りの者に何ができるか。私はその一点に絞って行動した。具体的には、家族用の暖かい食事を用意したり、自宅の日用品の買出しの手伝いをしたり、マイカーで送迎をしたり、看護用のヘルスケア用品を調達したりした。”

実際、病院に行っても、病人が睡眠中だったり、家族が病室不在だったりすることも多く、そんなときはそっとメモを残して帰りました。そもそも患者の病状変化を探る行為など目的外だからです。そして思いもかけず、恩師と奥様からは直接的に感謝の言葉をいただきましたが、それはあくまでも結果論。

警察と泥棒の話ではありませんが、同じような行動でも、目的(想い)次第で、相手にとって迷惑にもなり、感謝にもなるという貴重な体験をしました。

私がVEL資格を取ったのは1995年ですが、目的思考に加えて、「顧客(相手)の立場に立って考える」というVEの原則を学んでいたからとれた行動かもしれません。これからも、一企業のトップとして積極的にVEを経営に役立てていこうと思います。

(筆者は当会理事)